

INDEX

Preface 「教育は存在への激励である」

Afterword 「AIとともに歩む英語教育の未来」

長年、岩手県の教育界で第一線を走り続けている
岩手大学の小野寺哲男先生に話を伺いました！

生徒と向き合う授業づくり～生成AIの活用～

今すぐ使える実例を3つ紹介！

1. 試行錯誤の日々から

～生徒の“できるようになりたい”に寄り添う、AIと歩く英語授業づくり～
盛岡市立渋民中学校 中坂 明子

2. 授業＝生徒と向き合うチャンス

～自己表現を授業の柱に～
一関市立大東中学校 佐藤 友紀

3. 教科書題材を活用して、資質・能力を育む

盛岡市立上田中学校 山田 将之

Preface

教育は存在への激励である

岩手大学 教育学部 特任教授 小野寺 哲男

このタイトルの言葉は、大学の研究室の故・大沢俊成岩手大学名誉教授から教わった言葉です。意味について初任の頃の私はよくわかっていませんでした。そんなこと（大沢教授には失礼と知りつつ）より、日々の授業や学級経営、部活動指導等で心がいっぱいでした。毎晩、アパートで2つの学年分（6クラス担当）に対応する教材を研究し、手書きの学習プリント、ピクチャーカード（6色のマジック使用）、フラッシュカード等を自作し、翌日の授業という連続でした。生徒の存在への激励というよりは自分を叱咤しながら準備等に追われる日常でした。ただ、生徒に英語を好きになってほしい、英語を使って世界を広げてほしい等の願いは失われることはありませんでした。

一方、授業の実態は、私の生徒理解力や授業設計力・展開力等が不足しているためうまくいかないことがほとんどでした。それでも教師を続けてこられたのは、熱心に授業に取り組む多くの生徒の姿に励まされ、周囲の先生方から昼も夜も支え

られ、さらに毎年のように大沢教授に授業実践を報告し、ご指導をいただいたおかげであると今更ながら感謝しています。

今でも冒頭の言葉が重みを増してきているのを実感しています。

近年の状況を見ると、数年前から教科書に二次元コードが導入され、生徒一人1台端末の整備も進み、音声や映像を適時に使用できるとともに、AI活用が始まり、主体的・対話的で深い学びがより効果的に推進できる状況となっています。それに伴って手描きのピクチャーカード等は見かけなくなりました。その作成等に当てていた時間が不要となったのです。実に画期的なことです。

教材教具は時代とともに変化していきますが、その教材教具等の使用目的、場面・状況、活用方法等を吟味し、生徒の資質・能力を高めていくことが教師としての不易の部分であると考えます。それが「教育は存在への激励」に少しずつつながっていくと考えています。

試行錯誤の日々から

～生徒の“できるようになりたい”に寄り添う、AIと歩く英語授業づくり～

盛岡市立浜民中学校 教諭 中坂 明子

1. はじめに

生徒が「英語を使って何ができるようになりたいか」を自分ごととして考えられる授業づくりを大切にしながら、日々試行錯誤を重ねています。本校の生徒は素直で温かい一方、英語を使う最初の一步に

戸惑う姿もあります。だからこそ、生徒の良さを生かしながら、“学ぶ意味”が自然と見える授業づくりを目指しています。

2. 3年間でつなぐ学びの道筋

そのために、私は「3年間の学習のつながり」を意識して単元をデザインしています。今日の学びが明日や来年につながっていると実感できると、生徒は自分の言葉で表現しようとするようになります。

3年生では「旅行者や留学生に盛岡の魅力を紹介する」というゴールを設定しています。学年を越えた学びのつながりを、表現活動を通して生徒自身が意識しながら学べるよう、1・2年生の取り組みを位置づけています。1年生の自己紹介では、8月に着任したばかりのALTに向けて「自分を覚えてもらうための紹介」を行いました。初めての1対1でのやり取りは緊張もありましたが、「伝わった!」「もっと話したい」という気持ちが生まれ、英語を使う“必然性”を実感する機会となりました。

2年生では、盛岡市内に着任して1か月のALTの先生方に向けた「盛岡の良さを伝えるCMづくり」に挑戦しました。実在する相手であり、かつ“盛岡をまだよく知らない方”という相手設定は、生徒に「何をどう伝えると相手が喜んでくれるか」を自然と考えるきっかけを与えました。視聴してくださったALTからは「理由があるともっと伝わるよ」というフィードバックもいただき、生徒は“地元民だからこそ伝えられる価値”に気づくことができました。



自分自身を覚えてもらうために工夫をしている様子



生徒がALTへ盛岡の良さを伝える様子

こうした積み重ねの中で、生徒は少しずつ「伝えるって面白い」「もっと話せるようになりたい」という気持ちを紡ぎ始めています。3年間のつながりを実感できることで、学びが線となり、生徒自身の成長へつながっていくと感じています。

3. 教室に、三人目の協力者を——ALTとAIが支える新しいアウトプット設計

2年生で取り組んだ「おすすめしたい物のよさを伝える」活動では、AIを“第三の協力者”として活用しました。AIを取り入れた理由は2つあります。

1つ目は、「伝える相手」の必然性をつくるためです。本校ALTは日本語も堪能で盛岡生活も2年目。生徒より盛岡に詳しいため、「盛岡のおすすめを紹介する相手」としての必然性が弱くなる可能性

がありました。そこでAIに依頼し、“盛岡に来月来る予定の、スイーツ好きなALTの友人キャラクター”を作成しました。さらにAIに音声も生成させ、まるで相手が通話の向こうにいるかのような場面を設定しました。生徒はALTの友達に盛岡を伝えるために内容を深めようと取り組みました。

2つ目は、生徒が活動に取り組みやすくするためです。「どのような情報を入れると相手のためになるのか」に注力させるため、情報が不十分なモデル文を出発点とし、表現の選択や判断に時間を割きました。教師側で、相手や目的に応じた場面設定や条件を調整できる点も、AIを活用する利点の一つです。その設定をもとに、生徒は必要な情報の取捨選択や理由づけについて考えることができました。その過程で、課題への向き合い方や修正・振り返りがどの場面で行われているのかといった生徒の姿を、授業の中で見取りやすくなりました。



4. 教材準備を支えるAI——筋トレ・英文作成・音声の三本柱

AIはアウトプット場面だけでなく、授業準備を陰で大きく支えてくれる助っ人になっています。授業では文法や語彙の「型」を身につけるため、短時間で繰り返す“筋トレ”ドリルを行っています。単語をイメージと結びつけて覚えられるよう、PowerPointを用いて画像を添えて提示していますが、その素材を探すには時間がかかります。そこでAIに「コアイメージが伝わる絵を」「動作がわかる画像を」と依頼すると、必要な素材が数秒で揃い、活動量を十分に確保できるようになりました。

英文作成でもAIは頼もしい存在です。「中2の文法で」「教科書の流れに沿って」など条件を伝えるとすぐに複数の候補が提示され、さらに使われている語が既習かどうかも瞬時に確認できます。

これまで新旧教科書を行き来して調べていた負担が大きく減り、教材準備が格段に効率化しました。

最近では、定期テストのリスニング問題づくりでもAIを活用しています。ALTの予定が合わない際には、自分が一人二役で声を変えて録音したこともありましたが、AIによる音声は、対話文を提示する補助的な手段として、聞く活動を支えています。

こうした準備をAIが補ってくれたことで、私は生徒の反応を丁寧に拾い、アウトプットに向けたやり取りの時間をより大切にできるようになりました。

【AIで生成した画像集】



5. おわりに

ALTとAI、そしてJTE。それぞれが異なる役割を持ちながら、生徒の学びを支える“チーム”として柔軟に連携できるようになってきました。AIは華やかに主役を担うわけではありませんが、教師の試行

錯誤を確かに支えてくれる存在です。これからも、生徒一人ひとりの「できるようになりたい」に寄り添える授業づくりを続けていきたいと思います。

授業＝生徒と向き合うチャンス～自己表現を授業の柱に～

一関市立大東中学校 教諭 佐藤 友紀

1. はじめに

「世界とつながるツールとして、自分の気持ちを英語で表現できる生徒を育てたい」そんな夢を抱いて英語の教員になりました。私の仕事は英語を「教えること」ですが、生徒たちから「学ぶこと」、「感動をもらうこと」のほうが多い日々を楽しんでいます。日々の授業で大切にしていることは、以下の3つです。

- ①生徒と目標を共有する。
(年間目標はWhat can we do for the better world?)
- ②基礎基本 (Scenesやキーワード) は全員の読み書きを確認し、一人ひとりに前向きな声をかける。
- ③アウトプット活動 (RetellやSpeech等) では、自分の考えや気持ちをプラスする。

私にとって授業は、生徒と向き合える絶好のチャンスであり、生徒のことをたくさん知ることができ時間です。

数年前、ある生徒が仮定法過去の学習で、ノートの端にこう書いて持ってきました。

**“If I could go back 10 years ago,
I would tell my father my feeling of thanks.”**

東日本大震災で家族を亡くした生徒でした。

私が「お父さんに伝わっているよ。」と言うと、その生徒は「やっと書けた、自分の気持ち」と一言。こんな風に自分の思いを素直に表現できる生徒を増やしたいと思いました。そのために、私には何ができるだろうかーまずは自分が生徒へ自己開示すること。そして、生徒が表現しようとしていることを受け止め、どうしたら伝わりやすい英語になるかを教えたり一緒に考えたりしようと決めて実践を続けてきました。

2. 授業実践から

【単元テーマの例】

- 1年 私の「推し」紹介
- 1年 大東中の良さを新入生に伝えよう
- 2年 私の「イチオシJapanese culture」
- 2年 「わが町バンザイ」 in Daito
- 3年 Food Waste改善策を提案しよう
- 3年 誰もが参加しやすいイベント企画



生徒作品 「推し」紹介



生徒作品 「イチオシJapanese Culture」

○各Stepの位置づけ

個別最適な学習	Step1・2・4・6
協働的な学習	Step1・3・5・6

【単元の学習の流れ】

- Step1 単元ゴールと評価規準を共有
今ある英語力で「話す」と「書く」
表現しきれないもどかしさを実感
⇒メモ・調べる・真似るetc.を単元で継続
- Step2 基礎基本の確認と練習+自己表現
(Scenes/Listen/Speak&Writeなど)
- Step3 本文の読み取り (概要・要点・QA)
音読練習→使えるような表現Pick Up
- Step4 キーワードメモ・絵・写真で話す
- Step5 他の生徒との交流、良さの共有
中間指導→自分の表現を育てる
自分の内容を修正し、練習する
- Step6 発表・パフォーマンステスト
学びの共有、学び方の振り返り

本校では、個別最適な学びと協働的な学びを取り入れて、主体的に学びに向かう生徒を育成することを研究主題としています。

英語の授業でも各Stepを単元計画に位置付けることを意識して指導しています。

協働的な学習を成立させるのが、誰とでも活動できる集団作りです。ペア・グループ活動が成立し、お互いに学び合う楽しさを実感するには、生徒が安全に安心して学べる環境が必要であり、相手へのリスペクトを欠いた言動だけは厳しく指導しています。



実際に活動している様子

3. 学習者用PCやAIの活用について

正直、AIを使うことに抵抗はありました。「もう英語教師が必要ない」と言われたような気がして…。しかし、生徒たちが生きる世界にAIは必須アイテム。どう活用するかが大切で「まずは使ってみよう」と授業や教材研究で使い始めました。

最初はAIを喜んで使用する生徒たちでしたが、翻訳機能だけに頼った英文は、正しいけれど「自分が読めない」「相手に伝わらない」という経験を通して、既習の英文や簡単な表現を使うようになりました。「誰に」「何のために」「何を伝えるか」を意識して単元のゴールを設定することで、徐々に翻訳機能頼りではなく、伝える相手に合わせた表現を考える生徒が増えました。

生徒たちは、語句調べや英文の添削、AIドリルなどにAIを使用しています。スピーチの情報収集やアイデアを広げるために活用する生徒もいます。私は生徒たちに「愛のあるAIの使い方をしよう」と伝えています。生徒たちも「便利ではあるけれど、全て頼るのは違う」と考えていて、「心で感じ、考えたことを英文に入れたい」「自分にしか表現できない言葉や表現を伝えたい」という生徒たちもいて、願いが伝わっていることを嬉しく思う瞬間があります。

私は、読解問題の作成、単元ゴールや教材のアイデアの幅を広げるためにkAIryuくんなどのAIを活用しています。

4. おわりに

下の表は、現3年生（73名）のテストにおける英作文問題への回答率の推移です。

3月号	8月号	11月号	12月号
72.8%	74.2%	82.1%	92.8%

英語での表現活動を「楽しい」「やって良かった」と実感する生徒が増えると、教師が教え込まなくても生徒たち自身がインプットの必要性を感じ、自ら聞いたり学んだりするようになりました。英作文も「まず書いてみよう」「間違ってもOK」という生徒が増えました。

また、AIを活用することで、私は生徒たちから教えてもらうことが増えました。今までは、どう英語にするかを教えてほしくて寄ってきた生徒たちでしたが、最近は自分で調べた上で「どの表現が良いかな」「なんかじっくりこないんだけど」と相談に来ます。私も勉強になることが多く、これからもAIと上手に付き合いながら、生徒と共に学び、一緒に考えることを大切にしていきたいと考えています。

「〇か×か」ではなくて、「まずトライ」を大切に、今後も生徒と向き合って、英語の授業作りをしていきたいです。

教科書題材を活用して、資質・能力を育む

盛岡市立上田中学校 教諭 山田 将之

1. はじめに

「教科書をすべて丁寧にやっていたら、時間が足りません。」という悩みを聞くことがあります。私は「すべて丁寧にやった」経験がないので（笑）、この悩みを抱えたことはありませんが、皆さんはいかがでしょう。

もちろん1ページずつ丁寧に扱い、生徒の力を高めることは言うまでもなく素晴らしいことです。

2. 読むこと～書くこと 3年PROGRAM 2

この単元の題材は、睡眠の大切さを扱うものです。Can-Doリストの書くことを位置付けています。まずは、「あなたは、ALTに睡眠の大切さを伝える文章を書くことになりました。教科書を読み、使えるような文にマーカーを引き、簡単な内容メモを付けましょう。」というミッションを出します。生徒は、デジタル教科書を用いて、マーカーを引き、こんな内容の文だとわかるように付箋を貼っていきます。紙の教科書だと、線を引いてから、「あ！間違えた！」となってしまうのが嫌で全くマーカーを引けない生徒もいます。しかし、デジタル教科書だと、消しては書いて…が可能なので、躊躇することなくどんどん作業しているようでした。

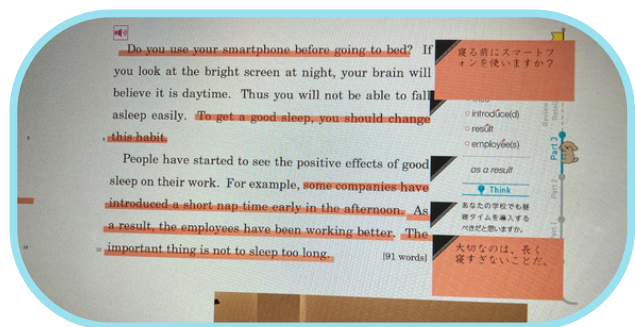
しかし、このままでは、全員同じ文章になってしまいます。そこで、睡眠について調べてくることにしました。

しかし、教科書をこなすだけに終始しては、生徒も教師も疲弊するだけです。せっかくそれぞれの学校で、各単元にCan-Doリストの項目を位置付けて取り組んでいるのですから、それを十分に踏まえて指導することが必要です。

そこで、Can-Doリストを基に、教科書をどう活用するか？、の事例を紹介します。

生徒は、睡眠不足がもたらす影響や、年齢別・国別の睡眠時間の比較などを調べてきて、これを英文にしたい！という状態で授業に臨みます。

最後は、仲間やALTからのフィードバックを受けました。睡眠について、一から書こうと思うと大変ですが、教科書の本文を手がかりにして書くことで、ハードルが下がります。すべての文章を丁寧に扱うのではなく、必要な情報を取り出すために読むという、目的に満ちた活動になります。



実際のデジタル教科書の画面

3. 聞くこと～話すこと（発表） 3年PROGRAM 5

この単元の題材は、チョコレートの歴史です。Can-Doリストの話すこと（発表）を位置付けています。社会的話題になる本文をしっかりと理解して発話につなげるため、この単元は1ページずつ取り組みました。まずは、本文を複数回聴いて、内容をメモします。ここでも”Let's tell about the story of chocolate.”ということで聞き取りをしました。

そのため、重要なポイントを聞き取ることになりました。その後、英語での質問に答えていきます。聞いた内容を英文にする際は、語順に注意しながら全体で確認しました。この積み重ねで、チョコレートの歴史について語れる準備が整います。最後は、伝えたい内容を選択して相手に伝えることになります。その際、文の順序や代名詞等に気を付けて、文章を構成しなければなりません。

さらに、内容として世界に目を向けられる、前単元で扱ったASLと、本単元のチョコレートの歴史が両方含まれるような英文を読ませたいと思ったのですが、なかなかありません。そこで、kAIryuくんの出番です。



実際に活動を行う様子

「多読教材作成（詳細モード）」を用いて、地の文と対話文の2種類を作成し、自分の好きな方から読んでみる活動をし、学習した内容を思い出しながら読む活動ができました。生徒は、「知っている題材が英文になって親しみやすかった」や「同じ内容なのに、違う表現で書かれていて勉強になった」と感想を話してくれました。

ここでも、教科書全体は聞いてはいるものの、取り上げているのはすべての文ではありません。さらに、こうした内容の豊かな英文にふれた際は、「学習の振り返り」も英語での記述を促します。本文をうまく活用しながら、自分の思いを表現することで、聞くことから話すこと、話すことから書くことへと、技能統合的な活動が展開できます。

■ kAIryuくんで作成した多読教材

① 地の文

Chocolate is a sweet treat that many people around the world love. It comes in many forms, such as chocolate bars, cakes, drinks, and candies. But what do you know about the history of chocolate? Long ago, chocolate was not as sweet as it is today. The first people to use chocolate were the ancient Maya and Aztec people in Central America. They drank chocolate as a bitter drink, not as a sweet snack. They believed chocolate was a gift from their gods, and it was used in important ceremonies.

When Spanish explorers came to the Americas, they brought chocolate back to Europe. At first, only rich people could enjoy chocolate. Over time, people in Europe started adding sugar and milk to make it taste sweet. Chocolate became more popular and factories began to make it for many people. Chocolate finally came to Japan in the 19th century. At first, it was also only for rich people, but soon it became a treat for everyone. Today, Japanese people eat chocolate on special days like Valentine's Day.

Chocolate makes people happy because of its sweet taste and soft texture. However, there is a dark side to chocolate. Many people who grow cacao beans, the main ingredient in chocolate, are not paid fairly. Some children are forced to work in dangerous places to help make chocolate. To help, you can buy chocolate with special marks, like "Fair Trade," to support better working conditions for farmers. By learning about the history and dark side of chocolate, we can make better choices and enjoy chocolate more responsibly.

② 対話文

Mother: Today I saw someone use sign language at the train station. Do you know what sign language is?
 Father: I think it is a way for people who cannot hear to talk.
 Daughter: That's right! I learned some signs at school. For example, this means "thank you."
 Son: Can you show me how to do "hello" in sign language?
 Daughter: Sure! You wave your hand like this.
 Mother: Let's all try to learn some simple signs together. It can help us talk to more people.
 Father: That's a good idea. By the way, do you know where chocolate comes from?
 Son: No, where does it come from?
 Father: Chocolate comes from cacao beans. People first used cacao in South America a long time ago.
 Daughter: Really? I thought it was always sweet.
 Father: At first, it was very bitter. People added sugar later.
 Mother: Let's visit a chocolate shop and see different kinds of chocolate.
 Son: That sounds fun!
 Daughter: Look, I see someone in the shop using sign language!
 Son: Let's greet them with sign language.
 Mother: Good idea. Everyone smiles and learns something new!

4. おわりに

冒頭に挙げた教員の悩みは、Can-Doリストを位置付けた「学習活動」の設定によって解決に向かうと信じています。何のために読みますか？、何のために聞きますか？、という目的を意識してインプットすることで、その後の表現にスムーズに移行することができました。

したがって、技能統合型の学習活動をいかに組み込んでいくかが重要であるといえます。そのため、Listenなどの問題は、各自デジタル教科書を用いて取り組む課題にするなど、授業で

扱うこと、統合して扱うこと、家庭学習などで取り組むことなど、精査が必要です。

また、個人的には、各教科の中で道徳教育を推進することの重要性も見逃せません。英語科は、コミュニケーションという他者との相互作用を通じて、また、教科書の豊かな話題を通して、他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性の育成を図ることも果たすべき役割であると考えています。

AIとともに歩む英語教育の未来

ここ数年、教育現場におけるICT活用が急速に進み、授業において端末を効果的に活用し、生徒の思考の深化や共有等を効率的に行う授業が増えてきています。また、生成AIの登場は授業づくりに新たな可能性をもたらしています。個別最適な学び・協働的な学びとともに、特に英語科においては、言語運用能力の育成が求められる中、AIの力を活用することは、教師の創造性と指導力をさらに引き出す鍵となり、一層、生徒の主体的・対話的で深い学びの実装が進むと期待しています。

開隆堂の「kAIryuくん」は、まさにその一助となるツールです。教科書に準拠した教材や評価資料の作成、さらには英語音声や画像の生成まで、教師の思考を助け、時間的・精神的な余裕を生み出してくれます。これにより、「教師が生徒と向き合う時間」を大幅に確保できるのです。

もちろん、AIは万能ではありません。教師の経験や直感、生徒の日常の学校生活の様子等を踏まえて実態を読み取る力に代わるものではありません。しかし、AIは「補助者」として、私たちの教育の質を高める存在になり得ます。

例えば、授業案をAIに提案させ、それを教師が吟味・修正することで、より多角的な視点を授業に取り入れることができます。

その際、AIへの指示等（プロンプト）の書き方が重要です。はじめはプロンプトをうまくかけず、遠回りの経験をしますが、慣れれば、よりの確になっていきます。私は、英語科の先生方がこの新しいツールを前向きに受け入れ、試行錯誤を重ねながら活用していくことを期待しています。AIとの協働は、教育の未来を切り拓く新たな第一歩です。生徒たちの可能性を広げるために、私たち自身も学び続ける姿勢を持ちたいと思います。

本小冊子には岩手県内の中学校の先生方の貴重な実践が掲載されています。大袈裟かもしれませんが、英語を通して生徒の未来を拓こうとする魂のこもった実践です。AIやデジタル教科書等のICT活用の実践を含むとても価値ある試行錯誤＝実践です。心から感謝いたします。ただ、実践には成果や課題があります。それを飽くことなく一歩ずつブラッシュアップしていくことが私たちの大事な使命であり、楽しみでもあります。教師の創意工夫とAI等の支援が融合することで、より豊かな学びが生まれることを願っています。これからの英語教育が、より柔軟で創造的なものとなるよう、皆さんとともに歩んでいきたいと思います。

岩手大学教育学部 特任教授 小野寺 哲男

令和7年度版 Sunshine English Course準拠

指導者用 中学校英語教材作成ソフト

kAIryuくん



.....
kAIryuくんは、生成AIを活用してSunshineに対応した教材づくりをサポートする唯一のソフトです。先生方の授業や教材作成を強力にバックアップします。令和7年度版中学校英語教科書「Sunshine English Course」の各学年の指導書内に体験版が格納されています。令和7年度中は無料でお使いいただけます（月20回の制限があります）。
.....

ラインナップ・定価

使用年数	AI使用回数/月 ※音声生成・検索は無制限でご利用いただけます。	定価（本体価格） スクールライセンス※1
1年間版	テスト・多読・画像生成 各100回/月	22,000円（20,000円）
2年間版	テスト・多読・画像生成 各100回/月	42,900円（39,000円）
3年間版	テスト・多読・画像生成 各100回/月	63,800円（58,000円）

※1スクールライセンスとは、1つの学校で1ライセンスのご購入で、学校内の先生の端末での利用に限って、無制限にご使用いただけるライセンスです。

本資料は「教科書発行社行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

FREE STYLE Vol.2 非売品

2026年2月4日 発行
<https://www.kairyudo.co.jp/>



開隆堂出版株式会社

本社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎03-5684-6111

発行 開隆堂出版株式会社 東北支社

東北支社 〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡3-10-7

サンライン第66ビル5階 ☎022-742-1213